

〈要約〉

戦後 70 年における歴史認識 ～以德報怨と東洋道義～

History recognition in postwar 70 ～ Itoku-hoen and Toyo-dougi ～

岩 武 光 宏
Mitsuhiro Iwatake

戦後 70 年を経て今なお日本は、かつての戦争に対する歴史認識というアポリア（難問）を背負い続けている。今日、近現代史における歴史認識や歴史観を問う書籍は巷間あふれている。しかし一方では、戦争体験者の高齢化は進み、戦争を知る世代の減少は著しい。それゆえ、この時期こそ日本人の歴史観を形成する上できわめて重要なターニングポイントとも考えられる。したがって、今後は世代間で継承されるべき戦時体験をさらに保存していく時期に迫られているといえよう。なぜならば、当事者の実体験による正確な「戦時体験の保存」こそ、後世の歴史認識を構築する大きな要素の 1 つであるからだ。

本稿では、2015 年 8 月 14 日に安倍晋三首相が発表した戦後 70 年談話を概観し、そのなかで、とりわけ歴史観に関わる核心部分を取り上げた。さらに、首相の私的諮問機関である「20 世紀を振り返り 21 世紀の世界秩序と日本の役割を構想するための有識者懇談会」の報告書 [20 世紀の世界と日本の歩み]、[大恐慌から第二次世界大戦へ]、[中国との和解の 70 年]、[終戦から国交正常化まで]、[中国との和解の 70 年への評価] を読み解くことを試みた。中国との関係では、蒋介石だけではなく、あえて汪兆銘と陳公博および南京国民政府を俯瞰することで、日中の歴史認識の相違を抽出した。

また、蒋介石の「以德報怨」と、日本の軍人による「東洋道義」的行動を重ね合わせながら、戦争の持つ多面性および両義性を浮き彫りにしたい。